

えびぞり

8

立川と語ろう 立川に生きよう
August 2005
écoutez bien Vol.24 No.249



表紙の人 高橋精規(高松町)
写真 細江英介

MURAGOYOMI

われらの村暦

国営昭和記念公園
「こもれびの里」の1年 ①

写真：五来孝平



た い ま つ

松明の盆

広い国営昭和記念公園の一角に、
まだ一般公開されていない区画がある。「こもれびの里」。
公募で集まった市民が農家や伝統文化を伝える人たちの指導を受けながら、
昭和30年代の武蔵野の農家を自分たちの手で再現している。
野良仕事に汗を流し、収穫を喜び、季節ごとの行事を体験する。
しんどいけれど充実した、われらの^{むらごよみ}村暦。

夏の農作業はきつい。じりじりと肌を焼く陽射し、したたる汗、ヤブ蚊…。そうした中で盆がやってくる。なすの牛、きゅうりの馬を作り、茅の縄を張って盆棚を作る。松明回しも先祖の霊を迎え、送るための恒例の行事だった。食事はみんなで作ったためだんご、すいとん。畑でとれたすいかもある。

麦はもう収穫した。盆が終わると、いよいよ稔りの秋に向けた仕事が忙しくなる。

今年6月に待望の作業小屋が完成した。これから古い農家や土蔵を移築し、平成19年度には再現された武蔵野の里が、一般にも公開される予定だ。



近藤信枝さん（多摩市在住）

3年前、こもれびの里第一期に参加してすぐ土の魅力に心をわし掴みにされました。今は食品加工班で、ひとつひとつ手作りで大家族の食事を作った時代を楽しく勉強しています。

「若い」を等身大で撮れる年齢なんだね

8月公開の映画「同窓會」監督 向井 寛さん



於：曙町 えくてびあん編集工房で 写真：加藤正嘉



■向井 寛（むかい・かん）／昭和30年代から今井正、佐伯清、吉田功らの監督のもとで劇映画助監督をしながらドキュメント映画を監督、1962年の初監督作品からこれまでに映画だけで500本以上の作品を監督、プロデューサーしてきた。立川市宮球場でロケが行われた「同窓會」は「GOING WEST 西へ…」(97年)「故郷」(98年)に続く高齢者をテーマにした三部作の最終章。曙町在住。

■芳賀敏博（はが・としひろ）／えくてびあん編集人

芳賀 向井監督の作品「同窓會」がいよいよ8月に立川でも公開されます。去年の春、そのクライマックスの野球の試合シーンのロケが立川市宮球場でありましたが、実は私もエキストラの一人として参加していたんですよ。

向井 そうだったんですか!? それはありがとございました。編集でだいぶカットしたから写ってるかなあ。写っているカットがあるといいですね。

芳賀 いえいえ。最終的に写ってなくても、加藤剛さんとか池内淳子さん、愛川欽也さんたちと一緒に映画にほんの少しでも参加しただけで満足なんですから(笑)。この「同窓會」は戦争に青春と野球を奪われた旧制高等学校生がモチーフになっていますが、同時に監督にとっては高齢者をテーマ

にした三部作の最終章になる作品だとか。

向井 そうです。最初に作った「GOING WEST 西へ…」は「記憶」という問題を取り上げ、「故郷」は「体力」、この「同窓會」は「孤独」がテーマです。それぞれにモデルの方がいるんですが、映画は自由にストーリーを膨らませて、全体として高齢者に向けたメッセージにしたつもりです。三本とも主人公が旅をするロードムービー。私は「自分探しの旅」と呼んでいますけど、今のお年寄り自分どこにいるのか、何をしたらいいのかわからなくなっている。年齢をかさねる重み、素晴らしいを忘れてしまっている。自分を見つめ直し自信と勇気を持って生きよう、それを外に表そう。そう言いたいんです。

芳賀 ドキュメンタリーから東映系のアク

ション、ピンク系、CMまで実に多くの映画・映像を撮ってこられた向井監督ですが、自主制作でこういう映画を撮ろうと思われたのはどうして?

向井 気がついたら自分も還暦を迎えて高齢者の世界の一人になっていた。<若い>ということを考えざるを得ない。それなら一歩踏み込んで等身大の高齢者の映画を作ってみよう。実は「GOING ……」の主人公のモデルは私の母親なんです。おばあちゃんになっても、とてもモダンな人でした。まず母を描こうと思った。凜としていましたからね。

芳賀 なるほど。等身大の映画というのは、年齢のこともそうですが、向井監督ご自身の人生とも重なるところがあるんですね。お生まれはどちらですか?

向井 旧満州の大連というところですよ。

芳賀 じゃあ、戦後の引き揚げはものすごく苦勞された……。

向井 親父は大連で貿易商をしていて戦争の成り行きに見切りをつけたんですね。膨大な資産を放り出して終戦前に両親の郷里の鹿児島に帰りました。親父は青島(チンタオ)に逃げることも考えたそうですが、母が「どうせ死ぬなら郷里がいい」と。青島に行っていたら今こうして話はいないでしょうね(笑)。

芳賀 「同窓會」の舞台にもなっている鹿児島は監督にとっても第二の故郷というわけですね。

向井 小学校1年で帰る中学まででしたが、鹿児島はどうしても好きになれなかった。大連がヨーロッパ的でモダンな街でしたからね。高校、大学と福岡で過ごし東京に出て、今回旧制五高(熊本)と七高(鹿児島)の野球ということで初めて鹿児島を撮りましたが、撮ろうと決めた時に何か心を突き抜けたものがありました。長年心づかえていたものがとれたんですね。映画が完成して昨年秋に先行公開したら1万人

もの人が観に来てくれた。やっぱり、つながってるものがあるんでしょうね。

芳賀 映画をやると思われたのはいつごろから?

向井 小学校4年くらいかな。

芳賀 ええっ! そんなに小さい頃ですか。すごく早熟な少年だったんですね。

向井 早熟というか、怖い物知らずのませガキというか(笑)。戦後、最初に観た映画は背番号16川上哲治とかの野球映画でしたが、そのうちアメリカ映画がドットとやってきた。それでエリザベス・テラーが好きになり、今でも先着何名様無料ご招待というのがありますが、そういうのに並んで観ていました。その頃から俳句も始め、高校、大学ではもっぱら本を読み漁ったり詩を作ったり……。

芳賀 小学校で映画を志して、学生時代にはもう映画を作る映画青年?

向井 いやいや、学生が映画を作ろうなんて考える時代じゃありませんよ。それに大学は経済学部です。まあ、入りやすかったということもありますが、親父が貿易商でしたからね。大学を卒業して各駅停車の列車で30時間くらいかけて東京に出て、教育映画の監督をしている知り合いがいたので、そこを頼ってそのまま映画の世界です。親父からは、まあ勘当のようなものでしたね。

芳賀 お母様の映画は作られているけど、お父様の映画は作らないんですか?

向井 数年後に実現させたい企画として、モンゴルを舞台に和製「シンドラーのリスト」のような映画を撮りたいと考えています。これは親父がモチーフです。親父はその後ずいぶん早く亡くなったんですが、満州ではピストルを片手に馬賊と取引したりしていたらしい。いくつもの鉱山を持ったりしましたが、裸一貫で満州に渡ったんだから裸一貫で帰っていいと思いつめていたようなところもある。生き方自体がドラマというか、男の生きざまとして格好いいんですよ。アホなところは私も似ているかもしれませんけど(笑)。

芳賀 「同窓會」に話を戻しますが、立川の市民球場でロケをしようと考えられたのは、やっぱり監督が立川にお住まい

だからですか?

向井 そうです。あの球場ではかなり以前に一度撮影をしたことがあるんです。夜間ロケで刑事が追い詰めるシーン。格好いいアクション映画でした。それと立川にやってきて、毎年球場の脇の根川沿いで桜を見ていて、いつかこの桜を映画で使いたいと思っていた。根川沿いの桜は撮影しやすいんです。枝があまり高くならず下に這うように伸びている。夜でも枝の上の方から撮ると美しく咲いた花の間から人物も見えて、最高の絵になるんです。ラストシーンにこの桜が出てくるんですが、どこで上映してもみなさんが言うのは「あれはどここの桜ですか?」「立川のね……」とね。それだけで撮った価値があったと思っています。

芳賀 根川の桜の価値は、立川の人ももっと自慢していい!

向井 ええ。この映画は、戦争時代に野球をやっていた旧制高校生のピッチャーが主人公です。彼は戦後日本を捨ててペルーに移住する。それから60年経って自分の人生の終わりを感じた彼が日本の美しい場所で死にたいと思って帰ってくる、という話です。死ぬ前にかつてバッテリーを組んでいたキャッチャーを訪ねるんですが、気配を察したキャッチャーが彼につきまとう。そして彼らの旅がやがてクライマックスの野球のOB戦につながる。撮影のときセカンドの守備に人がいないのに気がついたと思うんですが、それは特攻隊で戦死した仲間の守備位置なんです。それから、キャッチャーには妹がいて、主人公と恋をしていて、彼がペルーに逃げた後もずっと結婚せずにいた。満開の桜の下でラストシーンになるわけですが……。

芳賀 あの、監督。私はまだ映画を観ていないのでそれ以上はおっしゃらないでください。

向井 そうです(笑)。ただ戦争という時代を背負い、青春の想いを心のうちにそっと抱いて生きてきた人たちがいた。そういうことも描きたかったんです。

芳賀 シネマシティでの公開(8月6日から)を楽しみにしています。

Italian Cuisine サヴィニ	曙町2-7-10 525-1662
Art&Caffee Room 新紀元	曙町2-7-21-4F 528-6952
シネマカフェ	曙町2-8-5 525-1237
多摩中央信用金庫 本店	曙町2-8-28 526-1111
たましんギャラリー	曙町2-8-28-9F 526-1111
三上 鯉節店	曙町2-8-30 522-3259
旬彩懐石 若草茶屋	曙町2-8-30 526-0010
真如苑たま広報センター Mare	曙町2-9-1 521-6201
輸入文具 ホワイトハウス	曙町2-11-2-4F 525-8558
ステンドグラス ぱさーじゅ	曙町2-11-2-4F 522-1941
輸入雑貨 BASE 26	曙町2-11-2-4F 548-4326
スバグティ専門店 はしや	曙町2-11-2-4F 528-2338
立川リージェントホテル	曙町2-11-7-2F 522-1133
フランス風家庭料理 ラ・フランス	曙町2-11-8-6F 529-5522
ビックカメラ 立川店	曙町2-12-2 548-1111
洋風和血料理 このはな	曙町2-12-5-3F 527-8045
Wine & Dining るもん	曙町2-12-13 527-3022
東京三菱銀行 立川支店	曙町2-13-3 524-4121
いわしの たかね	曙町2-17-5-1F 527-5958
カフェ アバン	曙町2-17-15-2F 527-4479

えくてびあんの輪

立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあんは
リストのお店にいつもあります

今月は 曙町・高松町のお店です。

トボス 立川店	曙町2-18-18 525-0331
55DPE Station トボス立川店	曙町2-18-18-B1F 528-7558
三井石油 フロンティア立川	曙町2-19-9 527-3943
手打ちそば しえもと	曙町2-20-5 529-5468
溪流魚菜料理 一竿	曙町2-22-23-B1F 527-3640
園部肉店	曙町2-28-16 522-2901
立川市女性総合センター アイム	曙町2-36-2 528-6801
三田花店 立川高島屋店	曙町2-39-3-1F 526-4187
エミリーフローゲ 高島屋立川店	曙町2-39-3-3F 526-9788
立川高島屋 サービスフロア	曙町2-39-3-7F 525-2111
オリオン書房 ノルテ店	曙町2-42-1-3F 522-1231
ジェイティビー 立川支店	曙町2-42-1-8F 521-5550/5585
元祖つけ麺 味 幸	曙町3-4-2 527-4701
和菓子郷 花奴万葉庵 工場売店	高松町1-22-8 0120-398785
多摩画材 (景品交換所)	高松町2-1-25 522-6031
丸助青果店	高松町2-4-18 522-3542
米穀・食料品 横町屋	高松町2-11-23 522-2609
ふじ整体院	高松町2-25-2-2F 540-9155
ライブハウス Crazy JAM	高松町2-26-3-B1 529-9507
OBANZAI-YA 茄子菜	高松町3-14-2 521-2918

遙かなる「空の都」

戦後60年 消えゆく立川飛行場の面影

今年第二次世界大戦が終わって60年。
現在国営昭和記念公園などになっている広大な地域が米軍立川基地だったことさえ遠いことのようにだが、戦前戦中を通じて立川は日本の空の拠点だった。

日本最初の民間定期便が飛び、
陸軍飛行第五聯隊を中心に旧陸軍関係の航空機産業、研究機関が集まった立川飛行場。
「空の都」の面影は人々の記憶の中だけに生きている。

写真：五来孝平

陸上自衛隊立川駐屯地。東京周辺の航空部隊を統括する施設の一角に「立川飛行場史料館」がひっそりと建つ。自身も飛行機乗りとして中国で終戦を迎え、史料館に多くの史料を提供した三田鶴吉さんと駐屯地を訪ねた。

写真や史料が伝える「空の都」の面影。しかし、かつての立川飛行場をしのぶものはほとんど消えてしまった。記念館には第五聯隊正門の灯籠が残るが、それがあったファーレ立川の高層ビル街から、往時を想像することはむずかしい。

JR西立川駅とその周辺に残る古いコンクリート塀は、陸軍航空廠立川支廠、陸軍航空技術研究所などと民間地との境界だった。今も残る数少ない名残。軍施設が見えないように黒い板でかさ上げた塀を背

に多くの人がこの駅から出征した。塀の保存を願う富士見町の榎本敏見さんも、ここで父を見送った一人だ。

戦時色が強まるまで立川飛行場は軍と民間が使う日本の空の玄関だった。1931年、太平洋無着陸飛行という偉業をなしたとげた米国の「ミス・ビートル号」が青森県津代海岸出発前に整備をしたのもこの立川。

日本の空の玄関から陸軍飛行場、戦争末期の空襲と帝都防空戦、戦後の米軍基地と砂川闘争——歴史の波に揺れ続けた立川飛行場は現在、陸上自衛隊、消防、海上保安庁が共同で使う防災基地として生きている。離発着するのはほとんどがヘリコプター。自衛隊が使っている飛行機も順次現役を退き、翼のある飛行機の発着はふだん見られなくなる。



第五聯隊正門があった現在のたましん本店北側



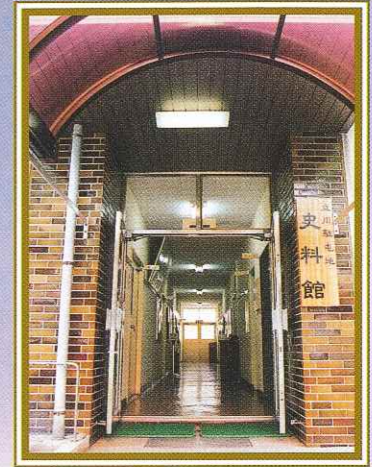
古いヘリコプター、飛行機が並ぶ通りに旧滑走路があった。



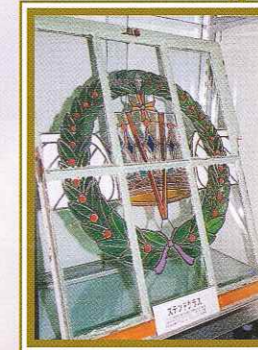
航空支廠時代の名前を残す踏切
（「航空支庁」になっている）



JR西立川駅に残る陸軍航空廠立川支廠の塀

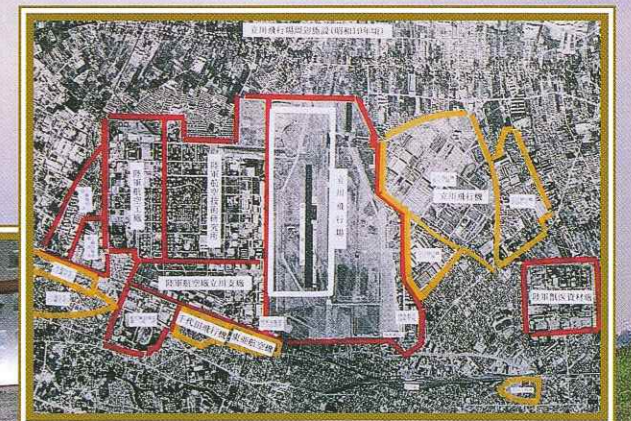


飛行第五聯隊正門の灯籠（立川飛行場史料館）



将校集会所のステンドグラス（立川飛行場史料館）

昭和19年頃の立川飛行場と陸軍関係施設（立川飛行場史料館）



展示を見る三田鶴吉さん



立川と多摩地域が
もっと楽しいホームページ

多摩てはこ
ネット

http://www.tamatebako-net.ne.jp/

多摩てはこネット編集工房
〒190-0012 立川市曙町3-4-3 武蔵ビル2F
tel 042-548-9606 fax 042-548-9609
e-mail message@tamatebako-net.ne.jp

常楽我浄

真如苑提供番組くじょうらくがじょう

スカイパーフェクトV 216ch、マイ・テレビ 84ch

土 曜 午前9時～9時15分
午後7時15分～7時30分
再放送/火曜 午前9時～9時15分
午後7時45分～8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。

立川に育てられて六十九年

真如苑

柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

地域にひろがる

心つながる

夢ふくらむ

たましん・たいへい・はちしん

2006年1月10日

多摩中央信用金庫、太平信用金庫、八王子信用金庫が合併し、
「多摩信用金庫」が誕生いたします。
お客さまのことを第一に考え、気持ちを通わせながら、
地域の皆さまのために力をひとつにする。
いままですら私達は、多摩地域の発展へ努めてまいります。
ぜひ、「多摩信用金庫」にご期待ください。

多摩中央信用金庫 太平信用金庫 八王子信用金庫

私たちは「と」のための会社です。

人と人、企業と企業、企業・商店とお客さま……
いろいろなコミュニケーションがあります。
私たち大廣社は、この「と」を的確に、迅速に、効果的に、
行なっている会社です。

と

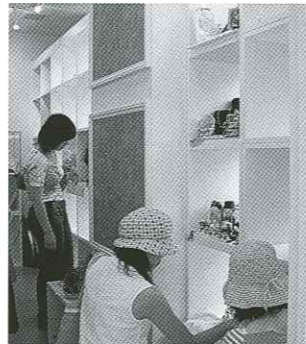
大廣社は、企画デザインから
印刷加工まで自社内で行っています。

PLANNING・DESIGNING
PROCESSING・PRINTING
〒190-0022 東京都立川市錦町5-17-13
TEL 042-527-1949 FAX 527-1949
E-mail info@daikousya.jp

えくてびあん流

〈きらら〉で夢キラキラ

柴崎町2丁目、JR西地下道入り口近くにある田中星美堂にレンタルボックス〈きらら〉がオープン、連日にぎわっている。改装されて一段と明るくなった店内を仕切って約40cm四方のボックスが80個。そのひとつひとつがお店になっていて、さながら小物のデパートのよう。作り手の感性が光るビーズアート、心を込めて作ったのが伝わるお人形、手編みのかご、アンティークジュエリー……。試聴もできるCDや煙草のパイプのようなマニアックな品もあり、出店する側も見る側も楽しい。大きさや位置で値段は変わるが、1ボックスが1ヶ月1000円から。お店を持って空間を自由に演出したい——そんな夢も〈きらら〉の箱のオーナーなら手軽に実現できる。お問い合わせは、田中星美堂内〈きらら〉042-522-3913(水曜日定休)まで。



この人この店 ㊤

カフェ

United Leaf

オーナー 田中正栄さん

コーヒーがあまり飲めないという田中正栄さん。「いろいろなお茶を探したんです。始めはクマザサとかドクダミとか。お若いのにずいぶん渋いんですね。「それが当時の健康茶ブームに乗って、売れて売れて」。気がついたら20代でベンチャー企業の社長さんになっていた！中国茶やハーブティーを扱ううちにお店も持ちたくなり、都内をあれこれ探しまわって最終的に決めたのが柴崎町2丁目、モノレール立川南駅近くのこの場所です。とにかくゆったりとした時間を過ごしてもらいたいと、青い天井、サーフボード……店内はすっかりハワイ。何種類ものブレンドハーブティーのなかから〈頭スッキリ〉をいただければ、心なしか頭の中のクモの巣も少しはとれたような。透き通ったガーネット色のスーパーグレードレイボスティーは抗酸化作用抜群とか。そう聞いて飲むと体のさびが落ちていくような気がするから不思議。お茶好きでなくても行ってみたいお店です。



〒190-0023 立川市柴崎町2-3-13
TEL 042-523-0799
営業時間 午前11:30～午後11:00
定休日 年中無休

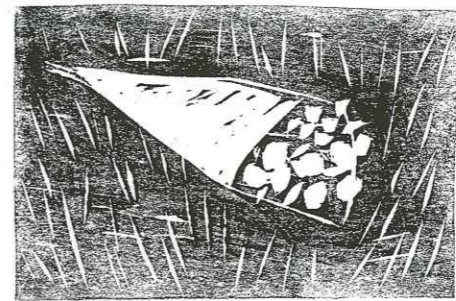
写真：五来孝平

◆ タチカワ誰故草 ㊤ ◆

涙かくしのサングラス

森 忠明

皮肉や嫌がらせを言う人間ではないから、素直に頷きたいが、世界有事の刻下、「幸せ」と認定されて喜んではいけない。「守るべき者」が、それは優等生の立派な男の思い込みで、オレなんか結婚以来一度も女房や娘を守るなんて憎越なこと考えませんでしたね。名探偵コナン、工藤新一くんは毛利蘭ちゃんに「おまえを絶対に守る！」って叫ぶけど、オレは女や子どもをオマエ呼ばわりできないよ。太古よりこの方、男は常に子どもや女の朝さ美しさに守られてきたんじゃないの。(ヒップポケット)



挿画：野崎義成

トから手帳を取りだし) ほれ、その証拠。ここに「西日」という夏の季語で作った俳句が(講談社版カラー図説日本大歳時記から)書きつしてあるんだ、女三人分と男三人分——交叉路の影なき西日別れ易し(野澤節子)、西日さし入る喪の家の皿の数(桂信子)、西日照りいのち無惨にありにけり(石橋秀野)。どうです。女はハドポールド&サムシンググレート。それにひきかえて男はこうよ——西日歩き余り者にも似たるかな(大野林火)、家中を浄む西日の隅にいる(西東三鬼)、西日中電車のどこかつかみてをり(石田波郷)。ね、男はシヨポイの。かく言うオレも黒眼鏡で実悪ふうにキメテますが、正体は涙かくしのためだ。あんたも知ってる有明昭一良ね、あの幼馴染が三十三年前の七月二十八日に琵琶湖で死んでから、涙が止まらねえわけさ。あいつとは肉関係は無かったけど、なぜか想いだすたびに泣けるんです。

有明家断絶の日の西日かな
七年前の祥月命日。三田花で供花を買い、車で多摩霊園へゆくと、なんたることぞ、有明家の墓石が無い。彼が祖母が百歳で死去、後継者絶え、墓を都に返したのだという。「生きてるときも、儂い風情のやつだったが、とうとう墓のない男になっちゃった」。

夏草ばかりの墓所に花を投げ、前掲の駄句をつぶやき、汗まみれで帰ってきた。

表紙の人

高橋 清輝さん(高松町)

立川女子高等学校山岳部が、中国の未踏峰コングールIV峰(6650m)の初登頂という快挙をなし遂げたのは1995年8月のこと。それからちょうど10年。山岳部顧問で登山隊長だった高橋清輝さんが現在、同高校の校長をつとめる。校長先生であるだけでなく、実は今も現役の山岳部顧問であり登山隊長。山に登ったことのない女の子たちが、重いザックを背負って階段を上り下りする毎日の練習や夏山登山の合宿を経て、やがて一人前の登山家に育っていく。常に自ら率先して指導し、卒業生を含めて多くの生徒を育ててきた山の男が今、校長として学校全体の先頭に立つ。

高松町・立川女子高等学校で
写真：細江英公

かたこと

まずお詫びと訂正です。7月号くえくてびあん流>『遊びと仕事のハーモニー』の著者・片山正雄さんのご住所は西砂町でした。またこの人>文中、福富さんの字が福富になっていました▼8月は子どもたちには楽しい夏休み。21年前の8月創刊のくえくてびあんにも節目の季節です▼新連載もスタートしました。裏表紙は立川在住の「葉っぱ画家」群馬直美さんの絵と文、ご本人が描くイラストも入った「Standing River Essay」▼「われらの村暦」は、国営昭和記念公園の中で市民ボランティアの手で進められている武蔵野の農家づくり「こもれびの里」を一年間かけてご紹介していきます▼この8月は60年前に太平洋戦争が終わった節目の夏でもあります▼VIEWでは、米軍基地を経て国営昭和記念公園や防災基地などになったかつての立川飛行場の、わずかに残る名残を三田鶴吉さんと訪ねました▼対談をお願いした向井寛監督の映画「同窓会」も、戦争の時代を経験したかつての若者たちの物語です。クライマックスの撮影地は監督が住むこの立川▼人生の歳月を重ね高齢者と呼ばれる年齢になっても、誰もが心の中に美しく輝き思っている——向井さんが作ってこられた「高齢者三部作」最終章でもあるこの映画は、シネマシティで8月6日封切られます▼22日からのくえくてびあんでも、よろしく願い申し上げます。(芳)

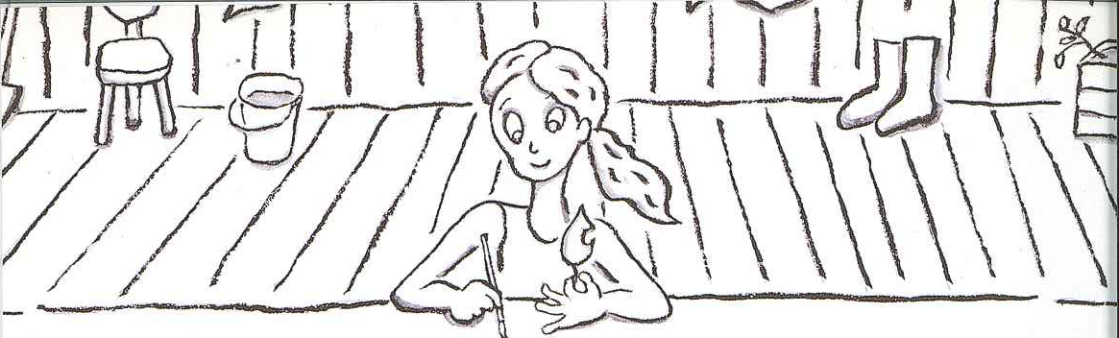
スタッフ

編集 大久保清志/清水恵美子/中薫子
デザイン 池田隆男(WATER DESIGN ASSOCIATES)
AMNET design factory
写真 加藤正嘉/五来孝平

えくてびあん ㊤ 8月号

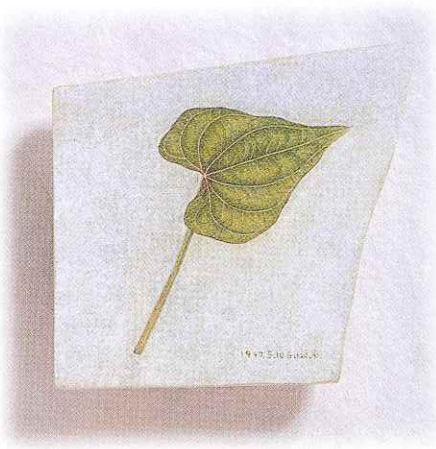
第24巻 通巻249号
平成17年8月1日発行
発行 えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL 042-528-0082 FAX 042-528-0065
編集人 芳賀敬博
発行人 加賀悦也
印刷 (株)大廣社

無断転載を禁じます。



Standing River essay

群馬直美の“葉っぱの精神”①



富士見町って、
不死身町なのかな？

小 さなムカゴをなかなか描く気が
せず、机の上にほったらかしてい
たら、芽が出た。まっすぐ立ち上がっ
て、「わたしを描いて〜」。大慌てで
描いた。

いろんなものを枯らせてしまっ
た。例えば、仕事で描いたオノエヤナギ、
野田のKさんが送ってくれたアイ
ビシ、スーパーで買ったシソ、昭和記
念公園で拾ったウバメガシのドンダリ
……。でも、捨てようとしたら根が
出ていた。植物の生命力は凄い！と
話すと「ムカゴは茹でて食べるとおい
しいよ」。今度、散歩がてら、ムカゴ
を摘んで食べてみよう。

アトリエの窓辺では、太陽の光に向
かって、みんな斜めにすすく生長
中。毎日をやりながら、「ここは
不死身町なんだ」と思う。



群馬直美

ぐんま・なおみ

群馬県生まれ。美術大学
時代にその生命力に癒され
た「葉っぱ」をテーマに
創作活動を続ける。テン
ペラ技法による緻密な葉っ
ぱや木の実に定評がある。
アトリエは富士見町。